



浪だつ大海より歳は生じたり、昼夜を配分し、一切の瞬くものを支配する。

{注：リグ・ベータ賛歌（辻直四郎訳1970）より。歳は時間、瞬くものは生物}

詩集 瞬き

2019-3-2現在 順次増補予定

野帳の片隅に、厳しい旅の合間のそよ風であった一瞬の想い、書きとめたはずのメモを順次繰って、寡作で拙い詩を探し出して、録しておく。しかし、読み返してみると、赤面するしかない青春もあったようだが、今さら隠すようなことでもない。それなりに、大人に成長したと思うからだ。

2018

火中栗不拾 而他之栗投 吾之深絶望 誰知高希望 他栗破燃去

2017-6-15

「こどもかんきょう絵じてん」のはじめに用に作ったが、使用しなかった。そこで、『環境学習原論』の序に入れた。

みらいのこどもたち、
まちやむら、やま、かわやうみをたんけんしよう。
きみたちのまわりには
うつくしいはなのいろ、きれいなとりのなきごえ、
ふくかぜやながれるみずのここちよいおと。
ちょっとこわい ちょうせんだけど おもしろいぼうけんがたくさんある。

めをみひらき、はなをふくらませ、みみをすまして、
あるいていけば、いちにちじゅうが たのしい。
かぞくやおとなたちはきみたちを
ちゃんとみまもっているから スキップして
うたをうたっても だいじょうぶだよ。



青春のころの詩

今、読むとかなり赤面ものだが、思い出事実として記録しておく。

1967年5月

その人に

一粒のかわいい種子（たね）を
陽光の夜露とで
いつくしみそだて
香とみつをぬすんではいけない
汚れた口びるを
花びらによせてはいけない

1967年5月22日午前2時

公園 東山公園の真夜中

ばらの香 まつの香 そして つゆの香
だあれも 真夜中の公園を見たことないでしょう？
冷たい砂場のトンネルの跡 すべり台 ベンチ だあれもいない
でも じっと心をすませると 聞こえるんです
ボートの ブランコの 木々の 花々の声が 聞こえるんです
昼間は知らない顔しているくせに
いまは小さな声で話しているのです
耳をすましてごらんなさい
ミーンと言う声がしませんか？
ささやきですよ
「二人の恋人を乗せて スイ スーイ」
「かわいいじょうちゃんを乗せて ブラン ブラーン」

1967年7月12日

向日葵

大きな葉を広げ
陽の恵みを無邪気に浴す
あくことを知らない
コロナは朝にはえる
深く 太く 地に根をはり
幼い児は従順に
陽の光を迎える

むくむくと内からふくれる
おしゃべりな入道雲
とびかう赤トンボに
おおらかな面をたれ
生命をはぐくむ
母なるは美しい
しずかにゆれる

1967年7月14日

日

心は

朝 目覚めて友を見る
なぎは二人を 語らしめる
太陽の南中は 恋をつけ
沈む前 それは激しく燃えあがり
そして そして
月の光が 友の面を清める 静かに
なんと すばらしい生命ではないか
愛とは

1967年7月19日

農村（むら）

暑くなくちゃ稲はみのらん
むくむくわきあがる黒雲は 一面 天（そら）をおおう
百メートルむこうの家は 小森（もり）は水煙（みずけむり）にかすむ
はえそろった稲の若草は 激浪に変わる
しぶきをあげて 波だち さわぎたち 農道（みち）も
電信棒も押し流す

雨は百姓に恵みじゃ
たたきつける雷は人をおびやかす
田の水面の浮草は 波間に落ちる雨滴に浮沈する

赤い自転車は 配達先の軒先にかくれる
はた屋のはたは カタンコトンの歌を忘れ 窓辺の水しぶきは 心にしみ入る
激浪は 単線の二両電車を 流しさってしまった
小駅（えき）にはだれもいない

1967年5月22日

温室

遠いエジプトから来た 水連と
赤い金魚が話してる
 青いナイルの幸せ かわいい池の幸せ
そして 今 愛し合う幸せ
赤い金魚は 水連にくちづけし その下で眠る

1967年7月20日

軍勢

青天にわきあがる 軍勢は陽の火炎をあびせ
いなづまを発し 雨滴の矢を放つ
氷の弾丸（たま）を 黒雲に乗じては飛びかわす

 人は恐れおののき うちしおれ・・・
軍勢は 今は 敗軍となり果てるも 山脈（やまなみ）を黒々と騎馬はかける
背後 山脈の燦然の輝きは 壮絶たる 軍勢の末期（まつご）の戦であった
 人は啞然とし 感嘆し そして 喜び・・・

1967年7月20日

破屋

何時しか破れこぼちた 水辺の屋（おく）
木曾の流れは 重なり 怒涛と押しよせ 没し去った
生死に清められ 栄えた いつの日か
あじさいのうす紫がにおっている
破れくちた 屋の陰で ひっそりと

1967年7月20日

水のえくぼ

真白に煙って 落ちる水
静かに流れる 田畑を潤す水
ひっそりと 山脈を映す水
異国の色香をもって 打ち寄せる水

どこに水のえくぼ あるのでしょうか
妖精は水のえくぼを 忘れたのでしょうか

1967年7月20日

いつか女の子は

女の子はいつか 女神になります
美しく 優しく

でも 男の子は女神の虜

ぼくはプリンセスのおそばに お仕えできれば 幸せです

1967年4月

恋

彼女は駆け寄り窓を開けた
彼は私を探している
彼は私を愛している

「誰のことを 言っているのですか」

朝の太陽が こんなに輝かしかつたことは
一度も これまでなかった

恋こそ人生の激流
君がいなければ 僕は不幸です

L' amour

Elle courut a la fenetre et l'ouurit.
Il me cherche.
Il m'aime.
“De qui parley-vous?”
Jamais le soleil matinal.
N'anait ete plus brilliant.
L'amour est l'agitation de la vie.

Je serais malheureux sanstoi.

1967年4月

春嵐

匂やかな交響詩に 水煙が躍る
激しいリズムは雨だれ
やわらかなのは菜の花の香
一粒こぼれて 大きく咲いた黄

1967年7月

七夕

煙草は もうもうと立ち込める
卑俗なラジオに 冷いやりとクーラー
鉄の球は うつろにガチャガチャと
動き回り 音を立てる
片田舎の街
竹に ナイロンの飾り玉

新聞紙の巨大な張り子
怪獣出現！ ナントカギラスに ナントカゴン
宇宙ステーションにロケットだ

1967年9月4日

裏切者 期待に魅入られし者

一杯の麦酒を汲む 裏切者よ
汝 自らを これにて清めん
勇気を持って そして
そして 彼の方に従え

一顆のオレンジは 汝の瞳を
再び澄ますであろう
これは許しではない
期待は汝を誘惑するのだ

美しき 素直な少女よ
裏切者の私は あなたから
去らねばならぬ お幸せで

裏切りの罪は 血にて償わねば
ならぬ
荒野の真ただ中で
白き屍となって果てるか
芥の巷で 放り捨てられるか

花々の中で安らかに眠ることは
望んではならぬ
汚れた血はそこで流してはならぬ
草花は枯れるに違いない

哀れな汝よ
もはや

汚れた血を流し出さない限り
許されぬ汝
死によってのみ
清められるであろう汝
誘惑に魅入られた弱き者よ
期待は汝の敵ぞ

ドルフィン、小熊、時計

汝に愛は与えられぬ
愛を与えることのみが
血の償いによってのみ与えられよう
もう一度 もう一度だけ
御救いの御手を

1967年10月10日

眠り

眠りはやさしい妖精
一日の疲れを癒してくれる
哀しい夜は
全てを暗闇に溶かしてくれる
（ああ 何という同情の心）
新鮮な生命は 朝に注がれよう

眠りはいたずらな妖精
勉強したいのに 遊びたいのに
（一日はたった24時間しかないんだ）
眠りの魅力には 誰もが
虜になってしまった

ああ 眠り ネムリ ねむり
おやすみなさい かわいい妖精

1967年10月16日

宮殿の影

みんなが信じないくらい
ロマンティックな夜です

月は木々の間に 家々の間に
見え隠れします

濁りの川も
夜は流れだけを残して
すべて消えます

草ぐさの中ではコオロギが
恋を雄弁に語り合っています

それが山崩したばかりの 狭い
石膏の土地でも
積み上げられた木材の
影であっても
夜は素晴らしい
大理石の宮殿です

美しい王女様 きっと
なんと清いお声 お一人で
宮殿のバルコニーに立っておられる

みずぼらしい兵士の私は 遠くから
あなた様をお守りしながら お声を
(畏れ多いことです)
お声を お聞かせいただきますよう

月はもう おやすみなさい
ビルの向こうの山に

1967年10月16日

雨に濡れて

雨に打たれて この身のすべてを
洗い流そう すべてを
バイオレットの小さな花も
棘の繊細な あの赤いバラの花も
この流れに 川の流れに
海に流してしまおう
それは再び浮かぶことなく
深く沈みゆくことだろう

だけど

雨の泉は 根まで流せようか
広く張り巡った根まで
根があれば また 来年
その後も 花は咲く

また辛い思いが
流れに蘇ろう

1967年10月16日

彼女に

謙虚に 心から
人生に 頬に
彼女に口づけします
いつか
激しく抱きしめることもあるでしょう
彼女 人生を
あなたを愛します 心から

1967年10月21日

小さなクエスチョンマーク

ただ好きなだけ 他に何がいるの
黙って！ 静かに
それは そっと しておいてください
川に月は流しておけば いいんです
草の中でコオロギは 鳴かせておけばいいんです
木の葉は紅く 黄く
落ち どこかへ去ります
風が 木枯らしが
君の心もその様ですね
それは そっと しておきましょう
波立たせは しますまい 石を投げて
春になれば また 芽も出ましょう
ただ 好きなだけなんです

Hold my peace

I will hold my peace.
Will swear to love you with open arms,
As long as I live.
Shall never forget the day
When met you for the first time.
I expressed my hearty wishes
For your happiness.

1967年11月20日

ひみつ

私は（何も）言うまい
心から貴女を愛すると 誓おう
生を受く限り

その日を忘れはしまい 決して
貴女に初めて会った日を
幸せは 貴女に 心から

1967年10月24日

あい あむ あ えつくす

ぼくは天才なの
気狂いとの間を
去来する天才なの

ぼくは寂しさなの
君にはわからない
寂しさという名の さあ？
人なの 人間なの？
それとも
何なの

1968年2月19日朝

誕生 18歳の君に

君が生まれし時
早春の兆しは
老いたる木枯らしと伴に
ゆりかごの辺りに集ひ
暖かき言葉にて
かの少女の明日を
祝福しき

君が微笑みし時
春陽の光は
庭池の薄氷の反射に

産屋の内に入りし
快き律動にて
彼ら母子の今日を
祝福しき

1968年2月17日

美心

我待静天命 後従美君心
男児得大志 奉其愛友恩

美しき心

我静かに天命を待つ 後に美しき君が心に従ふ
男児大志を得て それ愛友の恩に捧げん

1968年5月26日

ひる

海 灰白色の
黒い 砂
白いズボンと紅いセーター
手と 手をつないで 輪を描き
走ろう むこうの渚まで

1968年8月15日

よる

真夜中 海に行く
一人で 何か いい気持ちだ

真っ暗で
白い波 打ち寄せる音 太平洋だもの
強そうでいいなあ

1968年6月16日夕

ブランコ

女の子はあじさいの花でした
ぼくは遊園地を歩いていました
雨がサーッと降ってました
右をふと見たら
濃い紫が上に下にスースーと飛んでいるのです

雨に映えたその紫は
誰もいない遊園地で一人楽しそうでした
近づいてみると
小さな女の子が傘も持たずに
ブランコに乗っているのです
ぼくは傘をさしかけて 聞きました
「君 一人？」「・・・・・・・・」
「お母さんは？」「・・・・・・・・」
「友達いないの？」「・・・・・・・・」
「お家帰った方がいいよ もう夕方 濡れると風邪引くよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

女の子は何も言いませんでした
ブランコをこぎながら
ただ 微笑んでいるばかりでした
ぼくは来た道に戻りました
心残りに後ろを振り向くと
女の子はもういませんでした
女の子はあじさいの花でした

1968年8月26日

ゆううつ

あめ 夜のセンチメンタル
美 ブドウの葉緑素
あこがれ 心のオルゴール
海 少年の思い出
孤独 ぼくの強がり

1968年9月1日

夏休み最後の日曜日

海の歌

歩く 歩く 遥続く波
嵐一過 青い大空に
海辺 薪の山
トットトット トットトットト
入道雲を 吹き上げられない
海原に 浮かぶ幾多の小船
漂流の大木が ゴロリゴロリ
波をめざして進水
小さな女の子 三人
ばんざあーい

1968年9月25日朝

所在

「青春とは？」

そんな感傷的な問いは もう捨てよう
ぼくらは 青春を確かに 生きているんだ

ぼくらの足元 そこに青春が 確かに

確かにあるんだ

「青春とは？」

彼はきっぱりと言う

「青春とは俺のことだ」

力強い足取りで 歩いている

ぼくも 歩いている

想いに向かって 戸惑いながらも 歩いている

「精一杯生きることだ」

1968年12月25日

海の歌 Some songs of sea

序章

海は生命を育み

生命の歴史を 見守ってきた 優しく

時に

恐ろしいまでも美しい

多くの歌を

日々 新しい 生命たちのために

歌ってきた

聞こえる

前略 台風 大丈夫ですか？

夜明かしの朝

ただ 寂しいだけです

君は言いました

黙って耐えてみるの　そういう時は
ぼくは黙って耐えています
君を信じて

沈黙のLは　より深いもの
嵐の夜　勇壮な太平洋
太平洋に　押し寄せる　あの激浪に
恐れを感じます　素直に

でも　ぼくは海岸に　明日の朝
きっと立っています
太平洋のようになるんだと　叫んでいます

いつかぼくが太平洋になったとき　ぼくは今度
銀河になるんだと

1970年5月2日 a.m.10:18

全てへの終章

早く
死を実行せよ
苦痛は少ない
恐れるな！
この世にまだ忘れ物があるのか？
生きた　愛した
そして今ここにいる
何も言うことはない
ただ

虚無へ！

